

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷(十四第)

月一年四十四和昭

經濟論叢 每月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正十四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………六
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………四
産業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………三
印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………二
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………一

資本主義と支那事變……………	經濟學士 柴田敬……………	一四二
明治時代農村手工業の消長……………	經濟學士 堀江保藏……………	一六二
我國に於ける預金通貨統計の發達……………	經濟學士 中谷實……………	一七六
保險思想の發展……………	經濟學士 佐波宣平……………	一九三
歴史學派に於ける國民經濟の概念……………	經濟學士 白杉庄一郎……………	二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………	經濟學博士 石川興二……………	二三七
國事資金法の提案……………	經濟學博士 小島昌太郎……………	二四九
農山漁村財政の五箇年記録……………	經濟學博士 汐見三郎……………	二六九
支那の社會成層……………	法學博士 財部靜治……………	二八六

「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て

中川 與之助

滿洲事變を契機として日本の國家的・國民的自覺が高まり、國民文化のあらゆる領域に於て、「日本的」なるものゝ探求が興つて來たが、日支事變起るに及んで一層その勢を助長するに至つた。顧みるに「日本的」なるものゝ必要の叫ばれたことは今に始つたことではない。近くは明治維新以來も常にそれが繰り返された。併し明治時代に要求せられたる「日本的」なるものは必ずしも今日のそれと同一ではない。そこに時代の流れがある。今や新しき「日本的」なるものゝ探求によりて明治文化を一新しやうとしてゐる。洵に今日は文化の轉換期であり混亂期であり鬭争期である。この文化の混亂鬭争を克服して眞の國民的生命を發展せしめんには、この新しき「日本的」なるものゝ意義を正しく把握して正しき實踐に資することを最も肝要なりと考へる。

さて今日人々の間に行はるゝ「日本的」なるものをみるに種々の意義がある。「日本的」として(一)「日本に行はるゝもの」をさすあり、(二)「日本の爲になるもの」と解するあり、(三)更に「日本に鬭するもの」となすもの、(四)「日本の特種性に鬭するもの」となすもの、(五)「日本的に思惟すること」となすもの、(六)「日本の根本精神」と一致するもの」となすもの等を數へうる。

(一)、「日本に行はるゝもの」を「日本的」なりとせば、日本には多くの「外國的」なもの、例之、外國に生まれた

思想や制度や機械器具も行はれてゐるが、それらも亦等しく「日本的」なりといはねばならぬ。日本に行はるゝ「外國的」なるものをも亦「日本的」なりとせば、「日本的」なるものと「外國的」なるものとの區別は全く無意味となる。(二)、「日本の爲になるもの」を「日本的」なりとなす論者に、然らば何が「日本の爲になるか」と反問すれば、人々によりてその答はまち／＼であらう。蓋し日本人である以上、日本の不爲を希ふものはないとしても、何が日本の爲になるかの見解に就ては人によりて異りうるからである。かくしてこれも亦新しき「日本的」なるものゝ容觀的意義を把握しえないのである。(三)、「日本に關するもの」を「日本的」なりとなすことも亦正しとなすをえない。例へ日本に關する事物にしても之を觀るに種々の立場がありうる。「日本的」なみ方をすれば「外國的」なる方もある。このことは日本文化をマルクスの的に解することが、つい此頃までの我國の社會科學界に於ける一つの強い風潮であつたことをみても判かる。乍併「外國的」なみ方を以てしては例へその對象は日本のものであつても出來上つたものは外國文化であつて日本文化ではない。蓋し「外國的」なみ方を以てしては、それと本質を異にする「日本的」なるものを理解するをえず、理解したりとなさるゝ「日本的」なるものは、實は「外國的」なるものゝ自己投影にすぎないのである。若しそれ「外國的」にみても「日本的」にみても日本のものに關する限り、それが「日本的」であるといふに至つては、全く「外國的」なるみ方と「日本的」なるみ方との區別を無視するものでありて論議の外である。(四)、「日本の特種性に關するもの」を「日本的」なりとなすには正當の理由がある。蓋し特に「日本的」といふ所以は、「外國的」なるものとの對立或は差別を前提としてゐるからであり、「外國的」なるものとの對立・差別を前提とする以上、日本の特種性に着眼するは當然であるからである。併しこの場合も日本の特種性

「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て

となすものは人によりて異なる。或は外観的・形式的なるものに着眼し或は内観的・實質的なものに着眼し、或は理念や原理に着眼し或は實踐や行動に着眼する。或は又過去の・顯現的なものに或は將來的・未然的なものに着眼する。即ち人々の視點の異なるにつれて種々の日本特種性が生まれて來るのである。殊に社會の轉換期といはるゝ今日に於て、人々の抱く人生觀や世界觀の相異は、日本の特種性をみるにつけても種々の視角を與へるのである。かくして「日本的」とは「日本の特種性に關するもの」なりだけでは、今日の求めてゐる「日本的」なるものゝ意義が判らぬであらう。(四)、「日本的」とは「日本的に思惟すること」であるとなす見解は、「日本的」とは「日本の特種性なり」となすものよりも、更に本質的なものを捉へんとするものである。蓋し一切の社會現象の基礎となすものは、究極に於ては人間の精神であり思惟であるからである。乍併、「日本的に思惟する」といつても、或は思惟の形式に就ていふあり、或は思惟の内容・素材に就ていふあり、或は西洋的思惟方法を拒否するあり、或は之を攝取せんとするあり、或は神道的・佛敎的・人生觀に立つを日本的と考へキリスト敎的・猶太敎的・人生觀を外國的となすあり、或は人道主義に立つあり民族主義に立つあり、或は個人主義的なるあり共同體的なるあり等、何が「日本的思惟」なるかに就ては人々各々そのみる所を異にする状態である。惟ふに「日本的に思惟する」との重要なことを説けるは今に始つたことではない。儒敎や佛敎或はキリスト敎等の外來思想が日本に移入されたる時には、その時毎に外國的思惟を排撃して日本の思惟を擁護して來た。或は大化改新とか建武中興とか又近くは明治維新をみても「日本的思惟」に沈潜しつゝ改革の大業が遂行されてゐる。かくして唯單に「日本的に思惟する」といふのみでは、今日求むる「日本的思惟」なるものゝ眞義が分らなくなるのである。最後に(六)、「日本

の根本精神と一致するもの」を「日本的」なりとなす説である。論者はこの場合に日本の根本精神とは日本の國體精神なりとなす。日本の國體精神に即するものを「日本的」なりとなすことに就ては何人にも異論なかるべく、それは「日本の特種性」或は「日本の思惟」に更により具體的な内容を與へるものであらう。併し今日求めらるゝ「日本的」なるものは單なる抽象的な國體精神のみではないのである。若し夫れ單に國體精神の尊重といふことに止らば、それは三千年の我國の歴史を通ずる事實であつて、今日に於ける特異の事實ではないのである。従つて國體精神と一致することを「日本的」なりとなせば、過去にあらはれたる「日本的」なるものと今日にあらはれてゐる「日本的」なるものとの間に何等の區別がつかなくなる。殊に況んや國體精神に一致するとなさるゝ事柄の具體的内容が人々によりて異なるに於ては益々「日本的」なるものゝ意義が不明となつてしまふ。要するに「日本の根本精神に合致すること」を以て「日本的」なりとなすのみでは今日の「日本的」なるものゝ具體的・實踐體内容を與ふることが出來ぬのである。

二

「日本的」なるものゝ氾濫時代に於て、「日本的」なるものには右に述べたる如く種々の解釋があり、その意味する内容も亦決して一樣でないがそれは何故であらうか、惟ふにそれは現實に對する人々の實踐的立場、更にはその根底に横はる人生觀乃至世界觀の相違なりと考へられる。抑も理論は必ずや何等かの關心によりて探求せらるゝのであり、その關心は又必ず社會的或は個人的な實踐と關聯をもつ。(註一) 屢々人にいはるゝ「理論の爲めの理論」の追求は吾人も亦之を否定しないが、併しこの場合も更に高所に立ちて之を觀れば、當事者が意識するとせ

「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て

ざるとに拘らず、それは社會の時代史的な實踐の中での營みにすぎないのであつて、歴史的な具體的な國家・社會生活から全然遊離せる理論の追求はありえないのである。か様な立場から考へると、上述の如く「日本的」なるものを説く多くの人々も亦意識するとせざるとに拘らず何等から實踐的立場をもつてゐるのである。之を他に例をとれば、今日獨逸に於て矢張日本と同様に、「獨逸的」なるもの或は「民族的」なるものゝ探求が旺んに行はれてゐるが、それは決して漠然たる「獨逸的」なるもの「民族的」なるものに非ずして、民族共同體 (Volksgemeinschaft) を建設せうといふ實踐的目的の下にそれがなされてゐるのである。^(註二)

(註一) 山内得立博士は精神現象のこの志向性を説明して「それで精神現象を物質現象から區別ししかもそれによりて其の本質を積極的に規定し得るものは何であるか。……ブレンタノは此特質を中世のスコラ哲學に倣つて、「對象の志向的(又は精神的)内在 (die intentionale (auch mentale) Inexistenz eines Gegenstandes) にあると斷定した。即ち精神現象は何等かの對象を指示し、或一つの内容に關係することを以てその特性としてゐる。凡ての心的作用を通じて或ものが對象としてその裏に含まれてゐることを我々は見出す。ブレンタノは此の關係を内在的對象性 (immanente Gegenständlichkeit) とも名けた」云々と述べてゐられる。¹⁾

(註二) (a) ヒトラーはその著「私の闘争」に於て、ナチスが「民族的」(Völkisch) といふのは、民族的世界觀 (Völkische Weltanschauung) に立つ「民族的」なるものである。「民族的」なる概念は恰も「宗教的」といふ言葉の如く明瞭な境界がなく、非常に多面的に解釋されるし又實際上の使用に於ても著しくその限界が不明である²⁾。それ故に又「そのあらゆる意圖に於て天地霄壤の差ある一切の可能なる事柄が今時は「民族的」と云ふ假面を被つてのさばり歩いてゐる」といひ、³⁾ (b) ゾンバルトがその著「獨逸社會主義」に於て「何が獨逸的なるか」(Was ist deutsch?) を探求してゐるが、いふまでもなくそれは「獨逸的」な社會主義、即ち彼によれば「獨逸の事情のみを自當とする、唯獨逸にのみしかも今日の獨逸のみに行はれる社會主義建設といふ實踐的意圖

1) 山内得立著、現象學敍説 p. 55. 2) 3) A. Hitler, Mein Kampf. S. 7.

からなされてゐるのである。かれが獨逸的なものとして或は農業國なりといひ國防上危險き多き國なりといひ或は徹底性・即物性・自主性の強い民族であり精神的・行動的・多樣的の國民なり等となすが如き、何れも民族共同體の素質としての「獨逸的」なるもの、探究なのである。⁴⁾その他ナチス文獻は何れも民族共同體的立場から「ゲルマン的」乃至「獨逸的」なるもの、探求を試みてゐるのである。

理論が實踐と密接な關係をもつてゐることはこれを以てしても明かであらうが、然らば今日「日本的」なるものを求むる人々も何等かの立場に立つてゐるに相違ないのである。

人々が何等かの立場に立つて「日本的」なるものを探求してゐるとすれば、吾人は更に進んで今日の「日本的」なるもの、本質を考へてみなければならぬ。先に述べたる如く「日本的」なるもの、檢討の行はれたことは今に始つたことではない。過去に幾度か繰り返されたことである。又恐らく將來にも繰り返さるゝであらう。この意味に於て「日本的」なるものは歴史的・時代的意味をもつといはねばならぬ。かくいへば或は「日本的」なるものは萬古不易にして時代によりて變るものでないといふかも知れぬ。「日本的」なるものとして例へば國體精神が萬古不易の大原理であることは言ふまでもないことである。乍併吾人にとりて重要なるは存在としての國體精神のみではないのである。國體精神が如何に發現すべきか國體精神を奉じて國民が何をなすべきの問題である。國體精神を奉じて我等の祖先はその時代々々の問題を解決して來た。今我々に與へられたる問題は何であるかも亦か様な時代史的な意味から客觀的に把握すべく、それは決して主觀的な氣紛れの問題ではないのである。吾人は之を明にする爲め暫く明治時代の「日本的」なるものを顧みるであらう。

4) W. Sombart, Deutscher Sozialismus S. 122-148.

三

明治維新にあらはれし「日本的」なるものを追懐するには、先ず當時に於ける日本の時代史的・世界史的使命を顧みなければならぬ。明治維新は新しき世界史の展開が日本に促したる革新であつた。當時は西歐を中心として溢れ出でたる個人主義・自由主義の波が滔々と亞細亞にも押しよせた時であり、舊き西歐本位のローマンカトリック的な且つ封建的な世界の構造が解體せられて、新に理性主義的且つ自由主義的な原理によりて、西歐以外の亞米利加及び亞細亞をも包括する全世界的な組織が成立せんとした時であり、封建的桎梏から解放されたる各國の國民的生命が自由に伸展躍動し出した時であり、それはいふまでもなく人類文化の一大發展を約束するものであつた。而してかやうな世界史の轉換は決して徒らなる觀念の非らずにして、封建制度そのものゝ中に發展して來た物質的・精神的諸能力の迸出とみるべく、それは寧ろ自然的・必然的なものであつた。かやうな世界史の運行に逆行することは自らの發展を阻止するものであり、それは如何なる國家にとりても自滅・崩壞を意味するものに外ならぬ。従つて當時の日本にとりては如何様にこの新しき世界機構に参加し、又如何様にしてその運営に貢獻すべきかといふことが當然問題とならざるをえなかつた。幕末から明治にかけて幾多の鎖國論・攘夷論が行はれしにも拘らず、宇内の大勢を達觀して皇威を海外に輝かさんとて、傳統的「祖法」を棄て開國進取の國策を樹てたのであつた。今や開國によりて日本は世界の一部分となり世界と共に世界の中に生きることゝなつた。即ち明治維新は當然に日本に「世界的」ならんことを要求した。詳言すれば當時に於ける「日本的」なるものゝ眞義は、過去の日本に復ること非ずして、舊き日本の中に新しき「世界的」なるものをみつけ、又、新しき「世

界的」なるものの中に「日本的」なるものをみつけることが、別言すれば「世界的日本」を創造發展せしむることにあつたのである。西洋崇拜・西洋模倣といはるゝまでに「外國的」なるものを攝取したのは當時の日本としてはやむをえざりしことであらう。吾人は明治維新に於ける「日本的」とは「世界的」になることにあつたといつたが、このことは更に説明せられなければならぬ。「世界的」になるといふことは勿論自國の本領を忘れて外國化することの意味しない。現に明治の人々は「世界的」にならんが爲めに益々自國の精神に沈潜した。そして維新の偉業は日本の國體精神を失はずして、否その發揚・展開として成就されてゐる。明治文化は一見すれば日本の歐洲化・西洋化ともみゆるが、その實は歐洲文化の日本化である。自由主義・個人主義と雖も決して日本に於けるそれは西洋のそれと同一ではない。かくの如く明治維新に於ても國體精神が微動だもしてゐないのであり、その點に於ては大化の改新や建武の中興とも同様である。蓋しそれは萬世不易の大原理であるからである。従つて明治維新が唯國體精神によりてなされたといふのみでは、具體的・歴史的なる「日本的」なるものゝ姿がつかめないであらう。吾人にとりて明治の「日本的」なるものに學ぶべきは、時代史的・世界史的な使命をよく果したその實踐である。そしてそれこそ新しき時代史的・世界史的變革に於て今日の國民のとるべき實踐的態度を教ふるものであらう。明治時代は自由主義・個人主義的世界變革に即して世界文化の進運に貢獻した。今日「日本的」なるものゝ具體的實踐は果して何を意味するものであらうか。

四

新しき「日本的」なるものを求むるの聲は滿洲事變を契機として活潑となつて來たが、その求むる所の内容は明

治時代の「日本的」なるものとは異なる。この事は新しき「日本的」なるものが「明治的」なるものを批判し克服せんとする革新的性格を有するをみても分かる。この變化を何とみるべきか、惟ふに西歐を中心として發展し、一世紀半にも互つて世界を支配したる自由主義も世界戦争によりて崩壊過程を辿るに至つた。即ち先に露西亞の共產主義革命が行はれ、次で伊太利のファシヨ革命が起つた。革命の性質に相異はあるが、個人主義・自由主義を否定し世界の自由主義的機構から離脱したことは同一である。然らば殘餘の自由主義諸國は如何とみるに、當時獨逸は社會民主主義の名の下に自由主義の社會化を行つて自由主義を克服せんとするの苦悶の中にあり、英・佛・米は自國の利己的立場から各々鞏固なるブロックを結成して、自由主義的世界交通の門戸を閉鎖した。即ち自由主義的世界機構の一部分は缺壞され他の部分は獨占的排他的なものに變質した。相互の交通によりて利益を促進するといふ自由主義的利益共同社會は、統一と連絡を失つて抗争分裂の機構となつて來た。かやうな世界の構造變化がその構造の一部分である日本及び亞細亞に影響を及ぼすに至れるは當然である。日本としてはこの崩壊しかけた自由主義機構の殘骸に安閑として止まるを許さず、自己の生きゆくべき道を求むると共に、新しき世界の再建に貢獻すべき使命を感じずにはゐられなくなつた。かくて滿洲事變は起つた。滿洲事變の起つた經路は何にあつたにせよ、それは世界再建の爲に先づ始められた亞細亞の修理固成である。それは侵略戦争とか帝國主義的戦争とかいはるゝ戦争の範疇に全く入らざる全然特異の事變であつたことは、その事變によりてあらはれたる滿洲國の建國精神をみても、又その後の滿洲國の現實的發展をみても分かるであらう。滿洲事變の後に西歐に於ては獨逸でナチス革命が行はれた。ナチス革命は民族共同體の建設を目標として、個人主義・自由主義を克服せんとす

るものである。自由主義的世界機構は新なる滿洲國の出現により、更には又かつて自由主義的強國たる獨逸を失ふによりて一層その缺壊を大ならしめた。諸國が何等か共同體的のものを求めて個人主義的なものから離脱してゆくこの顯著な現象は、將に世界史の一大轉換とみななければならぬ。既に述べた如く日本は亞細亞の共同體的修理固成のために滿洲建國の偉業を擔當して完成した。滿洲國の健全なる發展の爲めにも、且つ又世界の再建の爲めにも日本はもはや利己主義・個人主義にふみ止まるを許されないのである。この秋に當り今次の日支事變が起つた。それは個人主義的世界機構の終末期に於ける最も大なる事件の一つであらう。その發生は自由主義的機構の殘壘に立て籠りて、經濟的な侵略・搾取を強化し來れる英佛資本主義と、自由主義的機構を離脱して國際的無產者國家を建設せんとする共產主義とが、支那を攪亂・混迷せしめて彼等をして何をなすべきかを知らざるに至らしめ、愚かにも抗日毎日の政策をとらしめたるに由る。日本の亞細亞の共同體的修理固成の聖業は支那大陸にも及ばざるをえなくなつた。それは支那を資本主義・共產主義から解放して、新しき世界の構成者・運營者としての地位を與へんとするものであり、文字通りの聖戰であるといはねばならぬ。かくして亞細亞に於てはもはや個人主義・自由主義は亞細亞再建の原理ではありえない。亞細亞が全體であり個々の國々がその分身 (Glieder) であるといふことを認識する時、即ち亞細亞の諸國が利己主義をすて、全體のために自己を歸入せしめる時に始めて、亞細亞は再建せらるゝであらう。

以上の如く世界戰爭後世界の自由主義的構造は變化し、殊に最近に於て亞細亞の構造は全く一變しやうとしてゐる。而してこの世界史の轉換は何人も之を個人主義より全體主義へ利己主義より共同主義へと向ひつゝあり

と解釋するに非れば理解しえざるを知らざらう。この世界史の轉換のさ中に立ち、然も最も重要な役割を演じつゝある日本が求むる「日本的」とは何であらうか、それはいふまでもなく、共同體的な新しき世界の再建と更にはその新しき世界に即應する新しき日本を創造するためであるといはねばならぬ。かく解することによりて始めて澎湃として社會に起りつゝある「日本的」なるものを求めるといふこの文化的現象の客觀的・世界史的意味が把握せらるゝのであらう。即ち明治時代の「日本的」なるものは、自由主義的世界構造に即して新しき世界的日本を創造するために叫ばれたるものであり、昭和の今日の「日本的」なるものは、準備されつゝある共同體的世界構造に即應する新しき世界的日本を創造せんために叫ばるゝものである。いかなる時期に於ても「日本的」なるものが國體精神に沈潜し之を奉體するによりてえらるゝことはいふまでもないが、それから導き出される精神的な面は時代によりて自ら異らざるをえぬ。明治時代には吾人は以前にはあらはれざりし、國家的國民的精神・國際的精神・科學的精神・自由精神・經濟的精神等を創造した。共同體時代には更に又精神の新しき展開をみることであらう。今や「日本的」なるものは單に共同體的社會建設のためといふことに止らず、政治上・經濟上・文化上具體的にいかなる「日本的」なるものを創造するかといふことにまで進んで來た。新しき時代は國體精神を奉體する「日本的」なるものゝ創造をまぢ實踐をまぢつゝある。

五

最後に吾人は「日本的」なるものを探求する態度乃至方法に就て一言しやうと思ふ。吾人は共同體的理論を創造せんとするに當りてかの所謂理性主義を排せんとするものである。共同體は理性の打算から生まれるものに非ず

して、寧ろ自然的な本能や性情から出發する。隣國の爲に起つとか全體の爲に自己を捧ぐるといふことは、他に強いられて或は利害を考慮して行ふのでなく、國民的人格や性情のやむにやまれぬ發露なのである。實に共同體の基礎をなすものは、人格や性情の本來的なものへの復歸であり、決して技巧された理性の業であつてはならぬ。而して又かゝるものにして始めて共同體は存續と發展性をもつ。共同體は理性の共同體に非らずして人格の共同體生活の共同體でなければならぬ。個人主義時代に於ける理性主義・打算主義・功利主義をすて、眞の共同體的人格に復ることが、共同體建設の要件である。屢々人々の高調する理性なるものは、個人主義社會に發達せる、かの個人主義的にのみ物事を考ふことに慣らされたる理性であつて、それは決して全體主義的社會に於ける思惟や判斷の決定者となりえないのである。かゝる個人主義的・自由主義的な理性を以てしては、共同體的な社會の運営は危険の上もなかるべく、それは非論理・非合理の連續としかみえないであらう。されば吾人は新しき時代の理論は、個人主義的な理論家から生まれずして今日の世界史的轉換期に於て個人主義の苦惱を最もよく嘗めたる人々によりて提供されると信ずる。即ち彼等は社會が個人主義的なものから共同體的なものに移るに非ざれば、個人も社會も國家も亡ぶるの外なしといふ生死の關頭を體驗せるものである。かゝる人々の實踐や理論はかゝる實踐から遊離せる而して眞實の存在に於ては依然として個人主義時代に止つてゐる人々の理性を以てしては、到底理解しえざるものであらう。共同體の理論は共同體的人格によりて共同體的人格は共同體の體驗によりて生まれる。而して人々に共同體の實踐を與へ人々をして共同體的人格に復らしむることが、共同體建設の根本問題である。われらの祖先が潔祓とか祭祀とか戦争とかその他多くの行によりて日本精神を鍛へつゝそれを

傳へて來たことに徴しても、「日本の」なるものは理性のみの擔當するものに非らざるを知りうるであらう。

次に吾人の述べんとするは、「日本の」なるものゝ創造は必ずしも「外國的」なるものを排斥せず、否それを攝取する必要大なりといふことである。個人主義・自由主義は外來思想なりとして之を排撃するの餘り、一切の「外國的」なるものを嫌忌蔑視せんとする人々の態度を吾人はとらざるものである。過去に於て日本精神が「外國的」なるものを攝取することによりて、如何にその内容を豊富ならしめたかを顧みるならば、「外國的」なるものは寧ろ大いに移入すべく、毫も怖るゝに足らないのである。眞の人・眞の國家にとりては總ての他人總ての他國は自己や自國を磨く砥石である。況んや世界の共同體を建設せんとする日本としては、他國の文化に深き敬意と理解をもつことは當然であらねばならぬ。共同體の建設には文化の融合が根本である。蓋し精神的理解融合なくしてはいかなる政治的・經濟的共同體も存続しえないものであらうから。明治以來日支が離間せる原因の一として、日本が維新と共に漢學や支那文化を徹履の如く棄て去りて、只管西洋文化を崇拜せることをも數へねばならぬであらう。道を求めてやまざる日本としては如何なる民族に對しても道の爲めには「同胞同行」であるといふ態度をとるこそ望ましいとせねばならぬ。

新しき「日本的」共同體的なるものを探求するの精神や人格は先に述べたる如くなるが、次に述べべきはかゝる人格による現實の研究の必要である。世界史は個人主義より共同體主義へ向ひつゝありといふことは最早疑ふの餘地がない。然らば今日の問題は具體的に如何なる共同體を作るかといふことに進められねばならぬ。かゝる問題に到達する時、何よりも大切なるは現實を知るといふことである。理念を以て現實をみ誤らざることである。

現實を知らずしては如何なる共同體理論も空論である。現實に即して且つ實現の可能性ある理論のみが眞の理論である。この點に於て明治時代に取り入れられたる實證主義は今日に於ても益々尊重すべき科學的精神なりといはねばならぬ。共同體理論の探求に就て述ぶべきはこれに止らぬが、それは他日に譲ることとしてこの小論を終らう。

六

以上吾人は「日本的」なるもの、種々相を檢討し、何故にその然るかを尋ねて、現實を如何にみるかの人生觀・世界觀の相異にかゝるとなし、更に吾人は今日の世界史を以て個人的なものより共同體なものへの轉換にありとなし、「日本的」なるものはこの新しき世界史の變動に即して求めらるべく、換言すれば日本共同體の建設に資せんが爲めに求めらるべきなりとなし、最後に「日本的」なるもの、探求方法として、「日本的」なるものは同時に亦世界的なるものなるべしとなし、更に「日本的」實踐の重要性や現實認識の重要性と共に、「外國的」なるものを一概に排斥する態度を排して寧ろ「外國的」なるものを攝取するの態度を望ましとなしたのである。惟ふに共同體原理としては日本に最も崇高なる國體精神が存する。是を奉體して具體的に如何に發現せしむるかは日本國民の今日の「日本的」なるもの、最大の問題である。(一三・一二・四)